

第11回 俚奏楽演奏会



去る10月22日、東京・紀尾井小ホールにて、本條秀太郎による「俚奏楽」の第11回公演が行なわれた。

言うまでもなく、俚奏楽は本條によって創られた三味線音楽の一つの分野だ

が、そこには端唄やら民謡やら、日本に根づいてきたさまざまな音楽が取り込まれている。今回の公演では、そのことをまざまざと見せつけ、聞かせてくれた。

昼夜二回公演の夜の部を聞きにいったのだが、まずは俚奏楽然とした「雪おんな」という曲で幕を開ける。主たる唄は本條が担い、そこに俚奏勢ひでの唄が影のごとく追いかける。静かな調べが身体に染み渡っていくようだった。

さて、とくに気になったのは三番目に披露された「かさ尽くし」と題された舞踊曲である。民謡「佐渡おけさ」や「相川音頭」のフレーズを構成したものののだが、これを聞いていて、伝統曲の「取り込み方」にこそ本條独特の手腕が発揮されると気づいた。唄々を「かさ」という一本の糸で縫い合わせていく。あたかも全体で一つの曲になるかのように、つなぎ合わされていく。しみじみとはじまり、ゆつたりと流れ、ときに軽妙に、ときに重々しく、歌われ、奏でられる。舞台横に映し出された唄の文句も相俟って、唄の世界にどつぷりとひたることのできた。